文部科学省認可通信教育

ON AIR

NO. 100

放送大学通信 オン・エア
発行月 平成22年12月
発 行 放送大学
〒261-8586 千葉市美浜区若葉2-11
043-276-5111(代)

CONTENTS

放送大学教授100号記念特別対談第6回 …… 1
100号記念 ON AIRの歩み …… 7
「Voice of Student」第3回 …… 12
平成23年度学部・大学院開設科目紹介 …… 18
学習センターだより …… 22
インフォメーション …… 24

100号記念 放送大学教授対談 第6回

2008年ノーベル物理学賞受賞 小林 誠先生をお迎えして

「内なる多様性と自分らしさが科学に不可欠」

高エネルギー加速器研究機構 小林 誠 特別栄誉教授 × 放送大学 生井澤 寛 教授 × 放送大学 米谷 民明 教授

本年10月の鈴木・根岸両教授のノーベル化学賞受賞の報に国中が沸き、科学への関心が高まっています。そこで、「ONAIR」100号の「教授対談第6回」は、特別ゲストに08年ノーベル物理学賞を受賞された小林先生をお迎えしてお送りいたします。対談のお相手は放送大学物理学教授、生井澤寛先生と米谷民明先生です。

※本文中は敬称略とさせていただきました。

6種類のクォークの存在を予言、「CP対称性の破れ」の起源に迫る

(写真左から)生井澤 寛放送大学教授、小林 誠高エネルギー加速器研究機構特別栄誉教授、米谷 民明放送大学教授

生井澤　本日はお忙しい中ありがとうございます。小林先生は、益川敏英先生とともに「小林・益川理論」で2008年ノーベル物理学賞を受賞されています。素粒子の分野での受賞でしたが、先生ご自身のお言葉で、なるべくかみ砕いてご紹介いただけますか。

小林　わかりました。──物質はつきつめていくと素粒子という最小単位からできています。その素粒子と質量が同じで、反対の電荷を持つ素粒子が反粒子です。そして、反粒子同士が組合わさってできたのが反物質です。両者は電荷等の符号が反対なだけでまったく対等なもの（CP対称性）と考えられていましたが、それでは説明のつかないことがあります。物質と反物質とが触れあうと「対消滅」といって大爆発して消えてしまいます。しかし、今の宇宙には物質だけが残っています。なぜでしょう。これには、物質と反物質がまったく対等ではないこと、つまり「CP対称性の破れ」が重要な役割を果たしています。

生井澤　物質と反物質には、わずかな性質の違いが

ある。だから完全には消滅しないんだ、というものですね。

小林　そうです。CP対称性の破れは実験室でも確認されていますが、その「破れ」がどういうメカニズムで起きているのかということは、ずっと分かっておりませんでした。私たちがしたことは、ある枠組み（CKM行列：カビボ・小林・益川行列）で考えると、クォーク※1の種類がたくさんあれば「破れ」が起きるのではないか、ということを示したことです。クォークは他のクォークに変身できる性質を持っています。当時（1973年）はクォークは4種類しかないとされ、3種類（アップ、ダウン、ストレンジ）が発見されていましたが、クォークの種類が少ないと変身の選択肢が狭く、間違い──つまり「CP対称性の破れ」は起きません。そこで私たちはクォークは自然界に3世代（6個）以上なくてはならない、と提唱したのです。その後、世界中の加速器の実験で残りの3種類（チャーム、ボトム、トップ）が発見されました。

米谷　素粒子という最もミクロな世界の探求が、宇宙誕生の謎に結びついているわけですね。

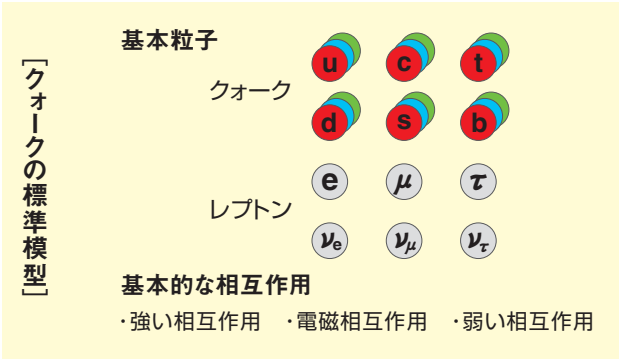
クォークの存在を信じ、素粒子の全体像を追究した坂田研究室時代

生井澤　「小林・益川理論」が発表されたとき、私も画期的で驚くべき理論だと思いました。小林先生も益川先生も、名古屋大学の坂田昌一※2先生の研究室に所属されていました。坂田先生は、クォークさえも階層のひとつにすぎず、さらに下部構造が無限に存在するという「無限階層論」を提唱され、「坂田模型」という理論もお出しになっています。

生井澤 寛教授
1941年千葉県千葉市に生まれる。1964年東京大学理学部物理学科卒業。1969年東京大学大学院数物系研究科物理学専攻博士課程修了。成蹊大学、東京大学、帝京平成大学を経て、放送大学教授。理学博士。

小林　「坂田模型」が発表されたのは1956年で、その後M・ゲルマンらによる「クォーク模型」へと発展していきます。ただクォークというのは、普通の素粒子と比べて電荷が−1／3、2／3という奇妙なもので、当時は実在すると考える風潮は世界的にありませんでした。しかし、坂田先生はその存在を強く信じておられ、その上で全体の素粒子像をどう描くか、というのが研究室の基本的なテーマでした。

クォークの標準模型説明図（小林 誠栄誉教授提供・6ページ用語解説参照）



生井澤　研究室の雰囲気はいかがでしたか。坂田先生を中心にみんなでさぞやご熱心に丁々発止と…。また益川先生との出会いもお聞かせください。

小林　私が研究室に入った時には坂田先生は学部長を務めておられ、忙しくてなかなか研究室に来られませんでした。そしてご病気で亡くなられて…。ですから、残念ながら私が直接ご指導を受けるということはあまり多くはなかったのです。でも、先生の志と自由闊達な研究姿勢は、研究室の中に脈々と息づいておりました。そんな研究室に入った当初、さてどんな研究をやろうかといろいろなグループを見て回ったのですが、あるグループが面白そうだったのでそこに潜り込んだのです。益川さんとの出会いでした。5年先輩で、研究室の助手を務めておられました。

米谷　素粒子の実体、つまり構成要素を追求するという坂田先生が築かれてきた伝統と、力の統一を成し遂げるために発展してきた「ゲージ理論」※3を結びつけたところが、小林先生、益川先生のアイデアのすばらしいところだと思います。ゲージ理論については、坂田研究室ではどのように考えられていたのですか。

小林　研究室では「場の量子論」※4を熱心に研究していた時期があります。「繰り込み理論」※5という技法に対しては、当時はどちらかと言うと批判的だったかもしれません。「場の量子論」の持つ困難にはもっと本質的な解決が必要だというように考えられていました。それが71年頃でしたか、「ゲージ理

論」が繰り込み可能である、と突然分かったのです。

米谷　私も大学院学生時代にゲージ理論の進展に出会い、その洗礼を受けた一人です。当時はまだクォークの存在さえ信じない人もいたのですが、ゲージ理論が自然界を記述しているのが確かだとしたら、クォークの存在を本当に切実に捉えなければいけない、と強く思いました。小林先生、益川先生のお仕事はまさにそこを追求した結果生まれてきた、という印象が強いですね。

小林　「模型」というのは単に構造がどうか、ではなく、もっと広い全体像を描くことが重要です。その手段として「場の量子論」が有効だという考え方は背後にあったと思います。そこへ「ゲージ理論」が組合わさった。

生井澤　ちょっとお話が専門的になってまいりました。少し別の側面からお話を伺いましょう。2008年のノーベル物理学賞では、南部陽一郎先生も受賞されています。受賞理由は素粒子だけではなく物性でも起こる「自発的対称性の破れに伴う励起の発見」というものでしたが、素粒子研究のキーポイントを日本人のお三方がきちんと押さえておられた。これは日本人でもできる、ということをお示しいただきとても力強い限りです。南部先生は渡米されてから、ますます先駆的な研究に成果を挙げられています。よく言われることに「頭脳流出」「頭脳還元」ということがありますが、日本と海外とそんなに違うものでしょうか。

※南部先生のノーベル賞受賞対象は、1970年米国に帰化する以前のもの。従ってここでは「日本人」と表記している。

小林　…ちょっとお答えし難いですね。というのも、私は長期で海外に出たことはありません。益川さんもそうでしょう。私たちにとって海外か国内かはあまり関係なかったと思います。ただ…坂田研究室というグループが一つの考え方で一つのテーマを追究する、というスタイルには、確かにユニークさはあったと思います。

小林 誠 教授
愛知県名古屋市出身。1972年名古屋大学大学院理学研究科博士課程修了（理学博士）、京都大学理学部助手。1973年「小林·益川理論」発表。1985年高エネルギー物理学研究所教授。2003年高エネルギー加速器研究機構素粒子原子核研究所長。2007年日本学術振興会理事。2008年文化勲章、ノーベル物理学賞受賞。高エネルギー加速器研究機構特別栄誉教授。

自己内部の多様性を信じ、自分らしい考えを育てよ

生井澤　素粒子の分野を中心にお話を伺いましたが、これから物理全般の世界はどうなっていくのでしょうか。世の中には、ある程度のことはもう解明できたのだから、世の中に役立つことをやることが大事、という人もいます。例えば、環境問題には我々物理に携わる人間も関わった方がいい、と。

小林　それは大きく、難しい側面を孕んだ問題ですね。確かに、社会的な要請に応える学問や研究が、基礎科学とひと続きになりつつある状況は感じています。基礎科学といえども社会情勢に無関心ではいられない、そういう傾向が強くなっています。ただ、そういうものばかりに動機づけられて研究を続けていると、発想の幅が狭くなるのではないか、と危惧しています。やはり多様性──外部からの要請ではなく、自己内部からの疑問・好奇心から発する多様性は科学の発展のためには不可欠です。一方で、学問の分野は広がり、それぞれ専門化が進んでいます。その中で研究しようとすると、より狭い分野をより深く追究しないといけません。それは同時に視野が狭くなるということでもある。そういう中で、多様性を維持しつつ、自分らしい考えをしっかりと持つ、育てるという姿勢はこれからますます大切になってくると思います。

生井澤　その「多様性と自分の考えを持つ」に、私は「大いに議論する」も付け加えたいですね。先生も益川先生と激論を戦わせたのではありませんか、若い頃。私たちの若い頃は、何でこんなのが分からないんだ！と口角泡を飛ばしたものです。

米谷 民明教授
1974年北海道大学大学院理学研究科物理学専攻博士課程修了。北海道大学助手、ニューヨーク市立大学研究員、CERN（欧州共同原子核研究機構）研究員、東京大学助教授を経て、1991年東京大学教授、2010年放送大学教授。

米谷　昔の学会には名物先生がいて、よく大きな声で議論していました。最近の学会にはそういうことが少なくなり、ちょっと寂しいですね。

小林　そうですね。私も最近は議論することが少なくなりました…。

生井澤　それは先生が偉くなりすぎたから、相手の方が遠慮されている（笑）。ところで、教育行政はめまぐるしく変わります。我々も当惑することが多いのですが、教育に関してはどんなご意見をお持ちですか。

小林　大学受験は、最近はそれほど厳しくなくなってきています。にもかかわらず、高校の授業というのは以前と変わらず大学受験を前提に行われています。どこでも同じ内容の教科書で教えている。あれでは、大学へ進んでも自由な発想で学べない、斬新な着想が生まれない。教科書検定のあり方に問題があると思います。もう少し、自由な、好奇心を刺激するようなものにならないものか、と。

生井澤　好きな分野だけ存分に勉強して、将来好きな分野で道が拓けるような教育システムになっていない、というのは残念ですね。先生は、やはり物理とか数学だけが好きだったのですか。…それで、小さい頃から物理をめざしていたのですか？

小林　語学とか社会などの暗記モノはさっぱりでしたね。小さい頃から物理を…と尋ねられても、う〜ん、いや…どうでしょう。はっきりしないですね（笑）。先生はいかがでしたか。

生井澤　私？ですか。私は、何か分からないことがあれば、きちっと知りたい、と。ナゼだ、ナゼだ、と。

小林　それは私も同じでしたね。

米谷　私は、この3月まで東大で30年間教員生活を続けてきましたが、その終わりの数年間、学生の気質が昔と違ってきたな、という感じがありました。学生との年齢ギャップが大きくなったためかも知れませんが…。東大での経験から言わせていただくと、詰め込みの弊害を感じました。たとえば、京大では比較的自分のやりたいことを自由にできるようになっているようですが、東大では全体のスタンダードをあるレベル以上に保とうという上から与える教育システムになっています。もちろん、さまざまな人がいるので一概には言えませんが、新しいものに柔軟に対応する発想ができない学生の割合が増えてきたように思います。

小林　詰め込みについて言えば、大学院で研究を始めると視野が狭くなりがちです。そこで基礎学力や多様性を養うことが学部教育に求められ、その時にこそ詰め込むべきなのですが…。

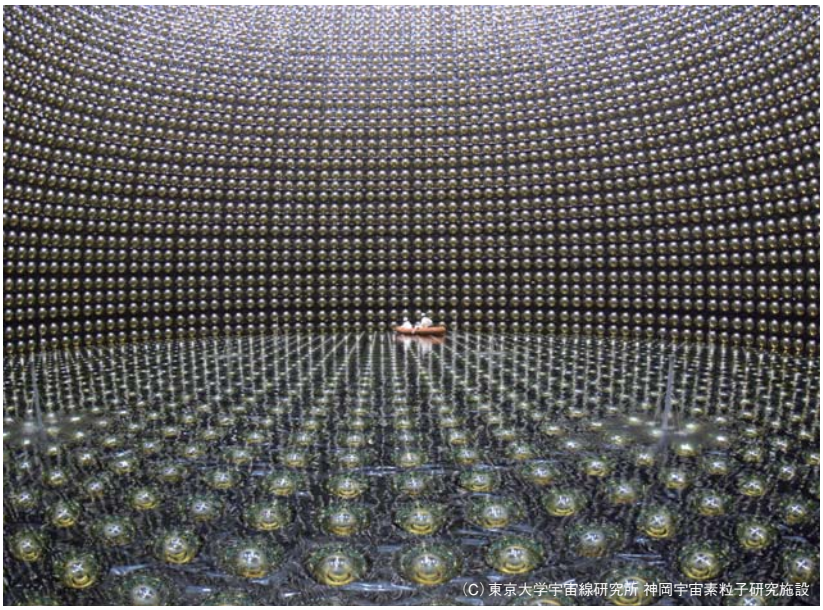
米谷　そうですね。詰め込みもある意味で必要な時期もあるのですが、やはりただ与えられるだけではなくて、自分で求めて訓練するということが大事ですね。最近の人達は、その余裕がないのかなという気がします。

Bファクトリーから国際リニアコライダーまで、“実験”で広がる素粒子世界

生井澤　話題を変えて、最近の“実験”についてお聞かせください。「小林・益川理論」の正しさをBファクトリーは見事に証明しました。

小林　KEK（高エネルギー加速器研究機構）のB

KEK（高エネルギー加速器研究機構）の粒子加速器
（高エネルギー加速器研究機構提供）



ニュートリノを観測する装置「スーパーカミオカンデ」。ニュートリノが微妙な質量を持つことを明らかにした。岐阜県飛騨市神岡町
（東京大学宇宙線研究所神岡宇宙素粒子研究施設提供）

ファクトリーは世界最高性能の衝突型加速器で、KEKでは3台目の大型加速器になります。「CP対称性の破れ」の起源解明を目的とした実験は1999年より進められましたが、70年代の1台目から数えると30年という時間が経過しています。加速器の技術を高め、実験グループの経験を積むにはそれぐらいの時間は必要だったのかな、と。その重厚な蓄積を経て、米国PEPⅡとの熾烈な競争の中、世界最高のビーム輝度を達成して「CP対称性の破れ」の観測に成功した、と思っています。

米谷　ニュートリノについては、特に実験面では最近の日本の寄与が大変大きいですね。カミオカンデからスーパーカミオカンデと進んで、大きな貢献をしています。小柴昌俊先生は神岡鉱山で実験を創始されたのが1980年代でしたが、超新星からのニュートリノ検出（1987）に成功され、2002年度ノーベル物理学賞を受賞されました。

生井澤　つくば市にあるKEKの加速器から人工的に作った素粒子を250キロ離れたスーパーカミオカンデに向けて発射し、ニュートリノ振動実験に成功した、というところまでは知っています。まだ続いているのでしょうか。

小林　そのK2K実験（KEK to Kamioka実験）は2004年11月に終了しました。今は、東海村にあるJ-PARCという大強度陽子加速器からスーパーカミオカンデに向けて同様の実験（T2K実験）を続けていて、今年の2月にJ-PARCから発射されたニュートリノの初検出に成功しています。

生井澤　ヨーロッパでは、質量をもたらすヒッグス場の担い手、そして“標準模型の最後の未発見粒子”とされるヒッグス粒子[※6]の探求も始まっていると聞いています。

小林　CERN（欧州原子核研究機構）によるLHC（大型ハドロン衝突型加速器）実験ですね。スイスのジュネーブ郊外にフランスとの国境をまたいで設置された大がかりなもので、2008年に稼働しましたが、直後にトラブルに見舞われて…。しかし、昨年の11月に再開しています。LHCは、これまでにないエネルギーに陽子ビームを加速し正面衝突させ、世界最大のエネルギーでの素粒子反応を起こすことができます。1〜2年ほどで何らかの成果が挙がると期待していいでしょう。

米谷　ヒッグス粒子に加えて、超対称性粒子[※7]の発見も期待できますね。いずれにしても、はっきりするまでには、数年はかかるでしょう。問題は、LHCの後がどうなるかです。小林先生はどう考えておられますか。

小林　その答えになるかどうか分かりませんが、国際リニアコライダー計画というのがあります。2004年に、国際協力で世界に一つだけ作ることが研究者の間で合意された「世界の研究施設」構想です。

生井澤　LHCが円をグルグル回るのに対し、こちらは確か直線加速器ですね。タイプの違う実験ができます。

小林　そうです。約40キロという直線トンネル内で、電子・陽電子を正面衝突させます。おカネの問題もあ

りますし、世界中で行われている研究・開発を集約させねばなりません。もう少し時間がかかるでしょう。

米谷　日本でもJLC（日本リニアコライダー）計画が議論されていました。日本にそのような最先端の施設ができるとよいですね。

生井澤　もっとお話を伺いたいのですが、時間がきてしまいました。最後に放送大学の学生にひとこと。

小林　放送大学の講義には感心しておりました。多彩で特徴ある講義をなさっている、と。放送大学という生涯学習を友に、人生を知的に高めて楽しんでいただきたいと思います。

生井澤　その「多彩で特徴ある講義」に小林先生もぜひご登壇を。本日は大変貴重なお話ありがとうございました。

用語解説（解説／米谷 民明放送大学教授）

※1　クォーク

物質の構成要素として現在最も基本的とされる素粒子。1964年、アメリカの物理学者M.ゲルマンとG.ツバイクにより独立に提唱された。その特徴の一つは、電荷の絶対値が電子の1/3か2/3である点にある。原子核を構成する陽子や中性子はクォーク3個からなるが、陽子と中性子を結びつける力を生じる中間子は、クォークとその反粒子からなる。クォーク間のカラー力と呼ばれる力により、クォークは単独には取り出せないと考えられている。素粒子の名称はギリシャ語に由来を求めることが多かったが、クォーク（鳥の鳴き声）という名称（ゲルマンによる）は、アイルランド出身の小説家J.ジョイス（1882-1941）の作品『フィネガンズ・ウェイク』に出てくる1節に由来する（ちなみに、ツバイクは、エースという呼び方をした）。レプトン（日本語で軽粒子）と総称される電子やニュートリノも基本的粒子だが、クォークとは異なった役割を持つ。

※2　坂田昌一（1911-1970）

湯川秀樹（1907-1981）は、原子核を構成する力を説明するため1934年に中間子論を提唱したが、坂田昌一は湯川と協力して中間子論の発展に寄与した。1942年、湯川の中間子と現在ミュー粒子と呼ばれるレプトンが別物であるという2中間子論を提唱した。同年に名古屋大学教授に就任して以来、名古屋大学の素粒子論グループを率いた。1956年には、3種の粒子（陽子、中性子、ラムダ粒子）から中間子や他の強い相互作用に関与する粒子を構成できるとする坂田模型を提唱し、クォーク模型への道を開いた。

※3　ゲージ理論

ゲージ（もとは尺度、基準という意）対称性と呼ばれる対称性に基づき、素粒子の相互作用を説明する理論。電気磁気の相互作用を記述する量子電気力学は、ゲージ理論の最も簡単な例。素粒子の強い相互作用（原子核を作る力）、弱い相互作用（陽子と中性子同士や、電子とニュートリノ同士の相互転換を引き起こす力）もゲージ理論として記述できる。考え方の起源は、アインシュタインの一般相対性理論にまでさかのぼれる。

※4　場の量子論

量子論を特殊相対性理論と両立した仕方で展開して得られる理論。粒子の相互転化や、生成消滅を記述できる。場は粒子を生成したり消滅させたりする役割を果たす。電磁場は、光の粒子＝光子を生成消滅させる。電気磁気の力は、電磁場の作用により光子が電荷を帯びた粒子間で交換される結果として説明できる。

※5　繰り込み理論

場の量子論では、粒子の生成消滅が限りなくミクロのスケールで起こるため計算の途中に無限大が現れる。しかし、観測量の関係には、この無限大が打ち消し現れないというのが、繰り込み理論の考え方。ゲージ理論は、この考え方が成功する（繰り込み可能）例である。

※6　ヒッグス粒子

弱い相互作用のゲージ理論で、クォークやレプトンの質量を生み出す役割を持つ粒子。まだ確認されていないが、LHC加速器の実験で検出が期待されている。ヒッグスはこのメカニズムを提唱したイギリスの物理学者の名前。1964年、ヒッグスを含む3名のヨーロッパの物理学者により独立に提唱された。

※7　超対称性粒子

クォークとレプトンとともに、光子のような力を生み出す粒子を同等に扱える対称性があると予想されている。この予想が正しければ、基本粒子には超対称性粒子と呼ばれる仲間の粒子があると考えられる。LHC加速器で検出される可能性がある。

100号記念

放送大学とONAIRの歩み

ON AIRは25年の歳月を刻み、100号を迎えました。今回100号記念として、放送大学とON AIRが歩んできた軌跡を、トピックスでお届けいたします。

「On Air」100号発刊に寄せて

学長 石　弘光

「On Air」が100号を迎える。100号といえば、大変な数である。1985年に初めて学生が入学したとき、第1号が発刊された。それ以来、延々と25年の歳月を刻み今日に達したわけである。その歴史の重み、その背後にある放送大学の息吹を感じざるを得ない。関係者の皆さんは、いま手元で紐とくと胸にせまってくるものがあるに違いない。

この間、遠隔教育の手段により数万人規模の学生諸君を教育する中で、この「On Air」は大学と学生を結ぶ重要な架け橋となってきたと思う。事実、学生諸君は年数回発刊される「On Air」を心待ちにし、様々な情報を得て気持ちも新たに学びを続けて来たに違いない。私が各地の学習センターを訪れると、「On Air」に掲載された記事を媒介として話が弾むことも多い。学位記授与式での私の式辞など毎回掲載していただき、出席できなかった方々も読んでは思い思いの感想を持ってくれているようだ。

「On Air」には、放送大学のエポックメーキングになる出来事が、極めて印象深い記事に纏められている。第1回目の卒業生が1989年に誕生したこと、附属図書館が1990年に完成し今日の姿になったこと、1998年はCS放送が開始され全国に電波が届くようになったこと、また2007年にはインターネット配信が一部で始まり、放送大学でもIT時代の幕開けを迎えたことなど、臨場感をもってわれわれに迫ってくるものがある。更に付け加えるなら、放送大学の誇る学習センターの最後50番目の東京多摩学習センターが、開設されたのが2002年のことであった。

私自身、4年ほど前に放送大学への就任が決まったときに、事務局が最初に送ってくれたのが、最近に発刊された数冊の「On Air」であった。全体として明るい基調の作りで学生の声も多くのページに載っており、この大学にこれから勤務できるのだと楽しみになったことを鮮明に思い出す。それ以降毎号、発刊が待ちどおしい。

さて次なる100号つまり200号までに、「On Air」はどのような内容になっているのだろうか。それはひとえに、放送大学自体がどのように発展・変貌を遂げるかに依存している。すでに過去2回公表したAction Plan 2008とAction Plan 2010では、放送大学の将来像が語られている。しかしながら、それらの中でも長くて10年程度を視野におさめているに過ぎず、200号まで展望することは困難である。

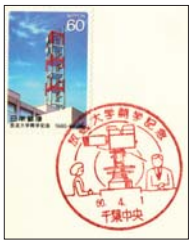
個人的にはおそらく次の2点がいままで以上に、「On Air」で多くの話題を呼ぶことになるだろうと考えている。第1が、国際化の流れが一層加速化し、国際交流、国際会議などの関連記事がより多くなっているだろう。放送大学のこれまでの国際化は、アジア公開大学連合（AAOU）、国際遠隔教育会議（ICDE）への参加に限られていた。それがここ数年、様変わりとなってきた。英米、中国、韓国などの公開大学との国際交流協定の締結、数多くの国際会議の主催、また毎月のように海外からの訪問客をむかえ、国際的な接触は急ピッチに進展している。

第2に、IT活用が一段とすすみ授業科目のインターネット配信も、数年後にはラジオ科目で100%、TV科目でも70―80%程度までなるはずである。学生との様々な手続きや連絡も、ネットを通じての作業となるだろう。これからは高年齢層の学生諸君も十分にパソコンが操作できるようになり、一部高品質画像の放送番組が残るもののインターネットによるe-schoolの色彩が一段と強くなってくるであろう。これが世界の遠隔教育の流れである以上、必然的に放送大学の教育もこれに倣わざるを得ず、「On Air」の紙面も現在とはかなり異なってくるはずである。（2010・10・12記）

昭和60（1985）年7月創刊号

第一期生の諸君を迎えて

記念すべき「ONAIR」創刊号。その第1面には、白亜のビルと放送塔が目にまぶしい、誕生まもない放送大学の外観写真が掲載されています



昭和60年4月、放送大学開学を記念して発行された60円郵便切手

「長い歳月と多くの方々の英知と努力によって、本年4月、放送大学が開学いたしました」。これは、「ONAIR」創刊号第1面、初代学長香月秀雄先生が寄せた「第一期生の諸君を迎えて」と題する文章の冒頭の言葉です。

その“長い歳月”とは…昭和40年代初頭、郵政省は新しいUHFおよびFM電波の実用化に向けての検討を開始しました。同時期、大学への進学志願率は上昇を続けており、文部省は高等教育の拡充を目的にこの新しい電波に着目。そしていくつもの議論を経て、昭和44年10月、「『放送大学』の設立について」を発表します。そこから道のりはさらに遠く、国会での足かけ3年・133時間にも及ぶ審議を経て56年6月「放送大学学園法」成立、同年7月放送大学学園設立、58年放送大学設置、59年放送局開局…とまさに“長い歳月と

鈴木善幸内閣・衆議院本会議で「放送大学学園法」が可決、成立

多くの方々の英知と努力”を要したのです。そして60年4月、日本で初めての放送による授業開始──。

香月学長の言葉は続きます。「…人間というものは、ものを学び、知るということを常に持ち続けるということ（中略）。これはある特定の時期、特定の年齢層に偏っているものではなく、一生これを持ち続けて、消えることがないということでもあります。（中略）放送大学は、まさにその為に作られた大学と言えます」。

“誰でも、いつでも、どこでも”──放送大学に求められる生涯教育の姿が高らかに宣言されています。

平成元（1989）年6月第14号

第1回放送大学卒業式が挙行される

皇太子殿下から「放送大学が人々の身近な高等教育機関として一層充実されることを願います」のお言葉を賜った第1回卒業式。下はそのようすを伝える14号誌面。

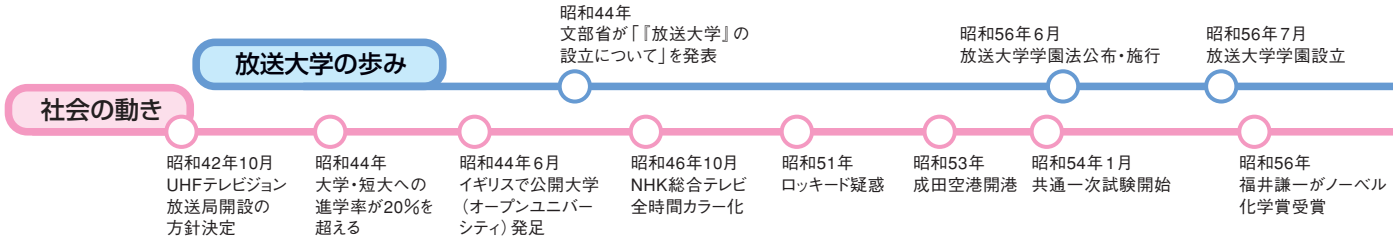
放送大学第1回卒業式―皇太子殿下のご臨席を賜って執り行われ、日本で初めての“放送による高等教育”に対する社会の高い期待と関心の深さを伺わせました。

香月学長は、祝辞の中で「18歳以上であれば誰でも入学し（中略）程度の相当高い授業内容に対する理解が何処まで通用するか」、「非情のカリキュラムを組んで諸君を追い詰めて来たのではないか（中略）罪めいた思いに胸がふさがる」と“初めての学生”であった卒業生544名を前にその心情を吐露。それだけに「胸の中にふつふつと湧き立ってくる喜びと感激とを、声をはりあげて叫びたい気がします。本当によくがんばりました。おめでとうございます」と歓喜にあふれる言葉を述べています。さらに「後に続く人達にとって諸君は絶大な励みのともしびであり、（中略）

第1回から数えて22回目、今年3月27日挙行の学位記授与式

明るく聡明な日本を開き、そして世界の人達の和を作っていく希望の人達になることを心から期待」すると結んでいます。

それから20年余。卒業生総数は6万人を超え、先輩たちが縷々として紡いだ“励みのともしび”は、今大きな灯火となって放送大学の行く手を照らしています。今年3月、石学長は卒業生を前に述べています。人生の岐路では挑戦する気概を持って「未知なる道に進め」と。そして、放送大学も“遠隔教育手段による生涯学習”の新しいモデルたらん、そのために新たな方向に一歩踏み出さん、と決意を語っています。



昭和63（1988）年3月第9号

アジア放送大学連合（AAOU）※が結成

平成13（2001）年6月第62号

放送大学と国際的な遠隔教育の動向
～第20回ICDE世界大会に参加して～

第20回ICDE世界大会（ドイツ）のようすを伝える62号

※AAOU結成当時、「AAOU」は「アジア放送大学連合」と訳されましたが、現在は「アジア公開大学連合」に呼称統一されています。

放送大学は、昭和62年11月、アジア公開大学連合（AAOU）結成に参画（9号）。そして平成13年には国際遠隔教育会議（ICDE）に参加（62号）して、この両会議を橋頭堡に海外の公開大学とさまざまな交流を図ってきました。ところが石学長は、92号（平成20年12月）「羽ばたく放送大学」と題した文章の中で述べています。「…いわば一種の鎖国時代であったといえよう。世界の国々では（中略）活発な活動を行っている。遠隔教育の技術の開発、教材の作成、学生の確保、学習センターの設置、ITの活用などさまざまな面で、われわれの学ぶべき点が多い」と。放送大学のそれまでの“国際化”は不十分であったとして、ここに更なる“国際化”“開国”へと大きく舵を切ったのです。

放送大学の“国際化”の第一歩となったAAOU結成を知らせる9号の記事

香港公開大学で開催されたAAOU第12回総会で。左から3番目が吉川学長

世界の公開大学との学術交流協定締結を加速するとともに、今年1月には「Action Plan 2010」を発表。「名実ともに国際的に評価される公開大学となることを目指す」とし、〈国際会議のわが国への誘致〉、さらに〈海外への教育サービスの提供〉の二つが謳われています。

そして早くも、前者に関してはAAOU総会の2012年放送大学での開催が、後者に関しても、同年のニューヨークでのインターネット配信による受講開始が決定しています。

放送大学の更なる“国際化”を訴える「Action Plan 2010」

平成2（1990）年6月第18号

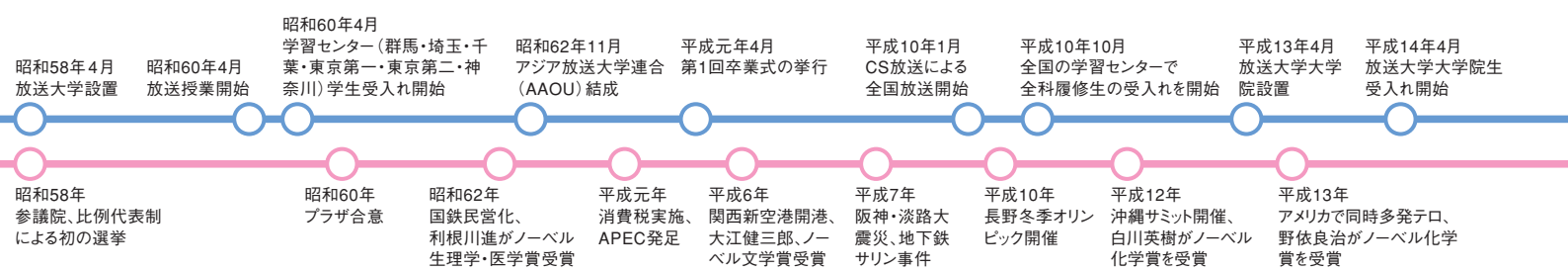
附属図書館が完成

「附属図書館コレクション展」が初めて設けられた「全国生涯学習フェスティバル」第11回のようすを伝える56号

学生の学習・研究活動を飛躍させる拠点に―そんな願いを受けて平成2年3月に完成したのが、大学本部に現在ある附属図書館。それまで本部と各学習センターの図書室で限られた図書資料を利用するしかなかった学生は、“幕張詣で”でより深く自分の「学び」を追究することが可能になりました。

平成22年3月現在、図書約31.5万冊と映像音響資料約4.4万点を収蔵。その規模は決して大きいものではありませんが、18号「附属図書館が完成」の中で比嘉附属図書館長は語っています。大手図書館が倉庫となっている現実に触れ「山高きが故に貴からず（中略）、蔵書数だけで価値を決めるのではなく、現時点におけるいろいろな分野の知識をどれだけ提供できるかによって価値を決めることができる」と。その言葉通り、翌3年にはセミナーハウスが隣接地に完成、泊まりがけでの利用も可能に。8～9年の改修を経て、視聴設備の充実と障がいのある方のためのユニバーサル化が図られ、日曜日開館も実現。さらに、12年に休日開館が、20年にはいち早く電子ブックサービスを開始するなどデジタルコンテンツの大幅な拡充が図られ、学生の利便性は格段に向上しました。また、放送大学の“全国化”と並行して学習センター近隣の大学図書館等との連携協力も漸次進行しており、学生の「学び」を強力サポートしています。

このように進化し続ける附属図書館ですが、一方で、独自の視点で広報活動を展開しています。平成8年から各地で巡回展示会を開催、平成11年からは、文部省（現・文部科学省）主催「全国生涯学習フェスティバル」への展示参加も。19世紀に出版されたシーボルトや17世紀出版のニュートンの著書、ちりめん本、幕末・明治期の古写真など、価値の高いコレクションを展示し、毎回多くの来場者の賛嘆の声を集めています。



平成10（1998）年12月第48号

CSを利用して全国放送開始

48号の「CSを利用して全国放送開始」。5ページにわたって特集が組まれ、その視聴方法なども詳しく紹介されています

「関東放送大学」――これは、放送授業が受信可能地域の関東地方に限られていたことを揶揄して言われた放送大学の別名です。何とか全国展開を――それは開学以来、関係者全員の悲願でした。

平成10年1月21日、通信衛星（CS）デジタル放送開始。そのひと月前に発行された48号のトップ面には「CSを利用して全国放送開始」の大見出し、そして文中には「日本全国、津々浦々、どこにいても放送授業が視聴できるという、大学設置以来の夢が実現する（中略）学習センターにおける学習にも、新しい時代が始まる」と小尾学長の喜びの声が踊ります。さらに「我が国はもとより世界の高等教育と生涯学習の歴史に、新たな、画期的な時代を拓くことになる。この時代をより輝かしくするものは（中略）全国に広がる学生の輪を広げ、層を厚くすることである」とし、そのために「全国での全科履修生の受け入れ」、「学習センターの整備、全センターでの面接授業の開講や学習相談の充実など全学をあげて取り組む」との覚悟を示しています。

学習センターの“全国化”達成を伝える51号誌面

そして50号（平成10年6月）では、嘉治副学長が「放送の全国化と学習センターの整備」という文章を寄せ、同年、センター最後の4県（和歌山、徳島、佐賀、鹿児島）設置を受け「…全都道府県で少なくとも一つの学習センターが存在する（中略）本年度第二学期から全科履修生を受け入れる運びとなった次第である。これによって放送大学は全国放送大学或いは日本放送大学と呼ばれるべきものになった」と喜びを表しています。併せて同号では、10年度第二学期に全国40カ所の学習センターでの面接授業開設を報告。以降、毎年その拡充に努め、現在では全国57カ所の学習センターで年間3000クラスを開講、面接授業の“全国化”も果たしています。

平成13（2001）年1月第60号

21世紀への展望

平成13（2001）年3月第61号

21世紀の大学院～「文化科学研究科」の創設～

大学院開設によって放送大学は21世紀へ大きく前進しました

平成13年、放送大学大学院開設――日本で唯一の通信制大学院の誕生です。しかし、文部省が通信制大学院設置の認可申請を受け付けたのはそのわずか3年前、平成10年のこと。その前年12月の大学審議会答申「通信制の大学院について」を受けてのことでした。

答申は述べています。「職業を持つ社会人の進学ということを考えた場合、自宅や職場から通える範囲に必ずしも希望する大学院がないといったことや、職場環境等によって通学可能な時間帯が限られるといったこと等地理的・時間的制約等から、大学院レベルの学習を希望しながらも、その実現に困難を伴う社会人も少なくない（中略）。このような（中略）学習ニーズに、より適切に応えていくため、大学院においても通信教育を行うことができるよう、制度を整備することが必要である」と。まさに放送大学の、働きながら学びたい人のための答申ではありませんか。

60号「21世紀への展望」と題する文章の中で、吉川学長は「21世紀における放送大学は大学院教育にどう取り組むかということで、大変大きな一歩を踏み出しました」と述べています。さらに次61号「21世紀の大学院」では、「『いつでも』『どこでも』『だれでも』という、いわゆるバリアフリーの教育を大学院まで広げることに意味がある」「生涯教育としての大学院教育が非常に社会から求められている。生涯教育を具体的に実現している放送大学が大学院をもつということに、非常に意味がある」としています。そして翌14年4月、549人が放送大学大学院第一期生になりました。

平成14年4月
50番目の多摩学習センターの学生受入れ開始

平成15年10月
放送大学学園法の施行に伴い、特殊法人から特別な学校法人に移行

平成16年3月
最初の大学院学位記の授与

平成18年12月
地上デジタル放送開始（関東エリア）

平成19年5月
ラジオ放送授業のネット配信開始

平成21年4月
ICT活用・遠隔教育センター設置

平成22年11月
AAOU総会で、平成24年放送大学での総会開催が決定

平成14年
小柴昌俊がノーベル物理学賞、田中耕一がノーベル化学賞を受賞

平成15年
米・英イラク攻撃、イラクへ自衛隊派遣

平成17年
愛・地球博（愛知）開催

平成20年
南部陽一郎・小林誠・益川敏英がノーベル物理学賞、下村脩がノーベル化学賞を受賞

平成21年
裁判員制度始まる、民主党政権発足

平成22年
根岸英一・鈴木章がノーベル化学賞を受賞

平成14（2002）年3月第65号

東京多摩学習センターの開設

多摩学習センター開設を伝える65号。全国で50番目、4年ぶりの新センター誕生です

「ONAIR」で毎号おなじみの「学習センターだより」。創刊号以来の定番コーナーと思いがちですが、実はその名称はたびたび変わっています。16号（平成元年12月）からは「学習」が取れて「センターだより」に。これは翌2年に、電波の及ばない関東区域外を補うためのビデオ学習センター（北海道、広島、福岡、沖縄）が設置されることを見越したためでした。そして、43号（平成8年9月）と47号（平成9年9月）は「地域学習センターの設置」に、51号（平成10年9月）は「新設学習センター紹介」に。CSデジタル放送による“全国化”を強く意識していることが名称からも窺えます。“ほっ”として少しひと休みした55号（平成11年10月）からは「学習センターお国自慢」に。“全国化”達成の喜びの余韻が伝わってきます。

55号から始まった「学習センターお国自慢」。郷土色豊かなセンターだよりなどを紹介しています

59号（平成12年10月）からは「学習センターの整備」に名称変更。この頃から学習センターの移転や新学舎建築が続いたためですが、その理由の多くが「手狭になったため」。新しい学び舎に多くの学生が希望に胸膨らませて集う姿が目に浮かびます。実はそういう中で、50番目の学習センター、東京では4つ目の「東京多摩学習センター」が開設されました。“全国化”達成の平成10年から4年ぶりの快挙です。このように見てみると、“全国化”を果たした第1世代がリフレッシュしている中で、元気いっぱいの第2世代が誕生した、と言えるでしょう。

そして、79号（平成17年6月）からは「学習センターだより」が復活、現在に至っています。

平成19（2007）年9月第87号

ラジオ放送授業のネット配信始まる

ラジオ科目のネット配信を伝える87号

UMUCとの締結。スーザン学長と。

87号（平成19年9月）で「ラジオ放送授業のネット配信始まる」を掲載以降、現在ではほぼ全てのラジオ科目をネット上で受講できるようになりました。そこで誰もが知りたいのが、“TV科目のネット配信は?”でしょう。93号（平成21年3月）の「どうなるこうなる、放送大学」の中で、岡部副学長は「TV科目は著作権などの権利処理に経費がかかるため、一気に数を増やせない事情がある」ことに理解を求めています。が、実は着々と布石が打たれていることが「ONAIR」から読みとれます。

88～91号では上海電視大学、イギリス公開大学、韓国放送通信大学（KNOU）、米国University of Maryland University College（UMUC）の4大学を訪れ、先行するネット配信への取り組みを伝えています。しかも2校は石学長自らが訪れました。その熱意が通じ、92号ではイギリス公開大学とKNOU、94号では

放送大学の締結校の多くが参加した、平成21年11月開催の「世界公開大学学長シンポジウムinさいたま」

中国中央広播電視大学、96号ではUMUCとの協定締結を報告しています。今後さまざまな交流を通してネット配信化に資する成果が得られるでしょう。

そして「Action Plan 2010」では、「インターネットを利用した教材の作成を開始する」と明記されています。つまり著作権処理が障害となっていたネット配信を、新規に専用の教材を作成することで加速するというのです。放送大学では、これらの取り組みによって2012年の「TV科目75%のネット配信」を目標としており、鋭意その準備が進められています。

“いつでも、どこでも、だれでも”—放送大学にまた新たな歴史の1ページが加わります。

創刊号から100号までの「ONAIR」の紙面によって、放送大学の歩みが分ります。単なる記録を超えて、「ONAIR」が「放送大学物語」になっているのは、それぞれの時代の学生と教職員の熱い思いとエネルギーが吹き込まれているからでしょう。

日常的に接触する機会の少ない学生同士及び学生と教職員の架け橋となり、放送大学への理解と愛着が一層深まるような「ONAIR」を目指していきますので、今後とも何卒よろしくご協力・ご支援をお願い致します。

ONAIR編集委員長
松村祥子

Voice of Student

Vol.3

在学生・卒業生の声をお届け

今号の声　生涯学び続けるということは、人生を創ること

放送大学での「学び体験」とは、卒業生や在学生の方々にとって、どんな価値があったのでしょうか。「人生の転機にされた方」、「人生の集大成に結びつけた方」、「学ぶことそのものを人生のパートナーとされた方」などなど、学んだことによる、影響力や成果の内容を、体験談という形でご紹介いたします。どの方のケースも様々な困難や壁を乗り越えられて、つかみとられたものだといえます。生涯学び続けることの意味を感じとってみてください。

case1

放送大学は、学ぶ方々のモチベーションの高さや身近なテーマが研究テーマになるのが魅力です。

堀 弘子さん
放送大学教養学部
発達と教育専攻（2003年3月卒）

もともと心理学やカウンセリングに興味を持っていたことや先輩が放送大学で学んでいたことを聞き、入学を決めました。夢を題材とした「ユング心理学」など興味深い科目がありました。でも何といっても卒業研究を通して、ゼミで学んだことが印象に残っています。ゼミの後輩の方々との交流は今も続いています。

私の研究テーマは、「ひとりっ子の親の心理」でした。私自身、ひとりっ子の子供の親として、漠然と感じていた「ひとりっ子だと○○だよね」という周りからの根拠のない反応。子供本人に対することはもちろん、母親としての気持ちにも敏感になっていました。そこで、30代～70代のひとりっ子の親たちへのアンケート調査を実施し、その意識のありようを研究したのです。当時の育児書の文献内容にも「偏見」に近い文章が掲載されていることにも驚きました。自分の生活に密着した身近な問題も、こうして論文という形にしていくことで、物事の見方や考え方、そして、社会に存在している既成概念の希薄さや多くの矛盾も知ることができました。

その後、個人的な学習を進めたい思いもあり、別の大学の大学院に入学しましたが、この時、放送大学で学ばれていた方々の「学ぶモチベーション」や「目的意識の高さ」を感じました。もちろん、年齢や社会経験の違いもありますが、このモチベーションの高さが放送大学の魅力だと実感しました。

間もなく目標であった「臨床心理士」の試験がありますが、これまでの学習の経験を活かして合格を目指したいと思います。放送大学なら、いつからでもスタートできますし、科目履修生から始めて、自分の目標に応じて、学習内容をステップアップさせたり、コースに入学するなどの様々な選択肢が用意されているので、身近な興味から学びを開始して、大きな次の目標に向かっていくことが可能だと思います。

そして、ぜひとも、自分なりの視点で自分だけの論文をまとめてみてほしいと思います。

case2

主婦として学び始め、身近な家計簿の研究を続けて、現在では短期大学の教授としての道を歩んでいます。

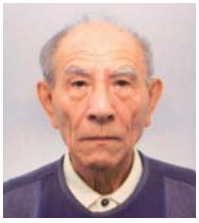
中川 英子さん
放送大学教養学部
生活と福祉専攻（1989年3月卒）
現・心理と教育コース 全科履修生

私は高校卒業後に結婚し、その後主婦業をしながら放送大学で学びました。長年のあこがれだった大学での学びは、本当に楽しく、あっという間の4年間でした。とりわけ「経済学」では、経済の3主体で世の中仕組みが理解できるようになったり、「生物学」では、DNAや生化学などで、からだの仕組みがわかったり、まさに“目からウロコ”の学習体験でした。また、卒業研究では悪戦苦闘しましたが、そのプロセスの中で文章力や思考力が身についたように思います。テーマは「長期家計の時系列的変動」でしたが、これは結婚以来20年間（昭和42年～63年）にわたり記録していた家計簿を分析したもので、その分析結果からは、この時代にあった一庶民の生活史と家計の姿が明らかになりました。その後は、担当教官からの勧めもあって、お茶の水女子大学の大学院へ進みました。修了後、同学の教務補佐を務める傍ら、他大学の非常勤講師勤務を経て、現在、宇都宮短期大学人間福祉学科の学科長の職にあります。本学では、生活科学、生活福祉、生活文化論、家族援助論などの科目を担当していますが、主な研究テーマは、「長期家計記録から見た庶民の生活史」と「介護福祉養成のための家政学教育のあり方」です。

一方、ここ7、8年、高校のスクールカウンセラーを務めていますが、将来は地域で“居場所”を作り、ボランティアで子育てや嫁姑問題など、家族問題の相談に携われればというささやかな夢を持っています。そのために、現在、放送大学で「心理と教育コース」を履修しています。そのほか放送大学では、「消費者と証券投資」のゲスト講師や栃木学習センターの面接授業「生活と福祉」の講師を務めさせていただいています。専業主婦であった私の人生は放送大学で学ばせていただいたお蔭で、大きく変わりました。65歳を目前にした今、職を得ていること、その根底にあった放送大学の存在を思いつつ、感謝の日々を送っています。

case3

自分の体験を歴史的に位置づけて研究するというアドバイスをいただき、1冊の本を出版するまでになりました。



山本 勇さん
放送大学教養学部
人間の探究専攻（2003年3月卒）
社会と経済専攻（2007年3月卒）
現・自然の理解専攻 全科履修生

私は、80歳まで仕事をしていましたが、69歳頃、「ともかく勉強したい」という気持ちが強くなり、石川学習センターに放送大学の仕組みを聞きにきたのがきっかけで、選科履修生として学習をスタートしました。6年間続けていたら単位がたまり、卒業に向けてやってみようと、全科履修生に入学、人間の探究専攻に進み、このときから卒業研究をやりたいと決めていました。そして卒業研究でテーマを選ぶにあたり、私は戦前に15歳で「満蒙開拓青少年義勇軍」に参加した経験があり、当時は「お国のために」という思いだけで参加したのでしたが、その「満蒙開拓青少年義勇軍」の本質は何だったのかを明らかにしてみたいと思い、指導教授の高木先生に手紙で質問させていただきましたところ、「満蒙開拓青少年義勇軍について経験したことを踏まえての研究というのであれば意義がある」とお返事をいただき、卒業研究報告書として纏めることができたのです。ところが、卒業研究の面接審査をしてくださった客員教授の藤本先生から、「この研究報告書に個人の体験が入っていて、日本の歴史の中で位置づけられるというものになればよかった」と指摘され、後日高木先生からも「かけがえのない体験を今後の人々にどのように伝えるか考え続けるように」とお手紙をいただき、卒業研究を基にして纏めたものを3年前に上梓しました。その間、社会と経済専攻に再入学し、卒業研究は「55年体制成立時の石川県におけ

る社会党の統一と保守合同」をテーマにしました。地方レベルについての文献が少ないので主に当時の新聞記事を集めるやり方で纏めました。このように「卒業研究」はとても楽しかったです。今は自然の理解専攻で学んでますが、長く勉強を続けているのも、学ぶことそのものが楽しかったからだと言えます。これから学ぶ方々にも、ぜひ学ぶことを楽しんで、研究を深めてほしいと思います。

case4

放送大学は、年配の履修者が多いイメージですが、もっともっと若い人にこそ活用してほしいですね。

大洞 敦史さん
放送大学教養学部
人間の探究専攻（2009年3月卒）
現・選科履修生

私は10代半ばから独学を続けてきました。お金を稼いでは書籍の購入にあて、今では5千冊ほどの蔵書があります。卒業研究では工藤庸子先生の下で、シモーヌ・ヴェイユというフランスの思想家を対象にしました。何よりも彼女の生き方に惹かれていましたし、彼女の思索の源泉だったギリシア哲学にも興味があったので。工藤先生には、ご著書や授業風景などから生涯学習の場がいかに魅力的であるかを学びました。現在は明治大学の大学院で管啓次郎さんという詩人から作文の訓練を受けています。今年の6月に台北で開催された映像製作のワークショップがきっかけで台湾に強い関心を持つようになり、卒業後は向こうに留学するつもりで目下中国語を学習しています。将来は日本で暮らす外国人、特にほとんど無名に近い国から単身で来ているような方々に、居場所を提供しながら日本語を教える活動に従事したいと考えています。日頃から放送大学の科目の豊富さや教材の完成度の高さには敬服しており、今も選科履修生として学習を続けています。ご高齢の方々が学び直す場という印象がわりと強い放送大学ですが、私は若い世代にももっと積極的に活用してもらえればと願っています。たとえば私のように一般的な学校制度に馴染むことができなかった人でも、放送大学がもつ空気感にはきっと居心地の好さを感じてもらえるだろうと思うのです。興味をひかれた科目をまずは一つ履修してみることから、好奇心が次々に飛び火し拡大してゆきもするでしょう。学生同士が対話を通じて互いの学問を深めていく機会も学習センターごとに様々なかたちで用意されています。若者にとっては異なる世代の人たちと交わること自体がなによりの学びの体験です。良い意味で自分本位に、学校制度を利用しようという姿勢が欲しいですね。放送大学の学生の向学心は日本一であると信じています。その熱気に10代の頃にあてられた事が、今の私の原点です。

case5

放送大学で学ぶことで自分が育てられたと感じています。夫も学んでいたので、夫婦の会話もはずみましたね。

五家 真弓さん
放送大学教養学部
生活と福祉専攻（1990年3月卒）
社会と経済専攻（1996年3月卒）
人間の探究専攻（2004年3月卒）
自然の理解専攻（2007年3月卒）
産業と技術専攻（2010年3月卒）

私は、「放送大学で学ぶことによって育てられた」と感じています。結婚後は専業主婦をしていましたが、ぜひ大学での教育を受けてみたいと思っていました。放送大学ができて、第１期の１学期から在学し、「生活と福祉」「人間の探究」「社会と経済」「自然の理解」と４回卒業して「産業と技術」に在学しました。また、来学期から放送大学の残りの心理学関連に入学して、全ての専攻の卒業の完遂を考えております。そうした学習期間の中で印象に残っているのは、やはり「卒業研究」を完成させてきたことです。今まで取り組んできたテーマは、「廃棄衣料の再資源化－反毛について」、「重層化する町内会」、「つくば公園通りにおけるニホンタンポポとセイヨウタンポポの生育環境の調査」、「アーチ構造とキーストーンの役割」など。自分でも信じられないぐらい幅広く学ぶことができたと思っています。それは、その時々の自分の興味と社会の流れがうまく重なって学習できたからだと感じています。

時流に合った「専門用語」や「最新用語」を知るだけでも、とても楽しいことでした。先生方も最先端の研究のお話しを教えてくださったりと、学びへの興味・関心はつきないものでしたね。こうした私の体験からも、放送大学で学ばれるならば、ぜひとも「卒業研究」をじっくりやってほしいと思います。印刷教材で単位を取っていくことも大切ですが、やはり学びの醍醐味は「難問」に挑むからこそ面白いと私は思っています。先生方からの「一言」が好きでしたね。ここまで、学ぶことを続けてこられたもうひとつの要因は、夫も放送大学で学んでいたことにあると思います。一緒に学んできたことで、お互いの研究テーマについて話し合ったり、励まし合ったりできたので、日々の夫婦のコミュニケーションにも良い影響があったと思っています。

case6

放送大学で学び始め、修士から博士号まで取得。お世話になった皆様と同門であることが誇りです。

松原 朱實さん
放送大学大学院
文化科学研究科
政策経営プログラム（2005年3月修了）

私は、現在広島大学病院検査部副臨床検査技師長をしています。放送大学に大学院文化科学研究科が設立された当時、放送大学で学んでいましたが、“飛び級制度”があることを知りました。受験資格取得のひとつの要件となる「論文・学会発表」などを申請することで、修士課程に入学することができました。修士課程では、政策経営プログラムを選考し、医療従事者として専門知識が生かせ、興味のあった「医療感染性廃棄物処理」をテーマにしました。“感染性廃棄物”と“リサイクル”の環境に対する相反したテーマに苦労しましたが、鈴木基之教授の「修士論文は世の中に貢献できるものを」「論文は残るのだから、より良いものを最後まで」というお言葉に激励されました。ある時、相談に伺った助教授の先生から「修士取得なら、博士課程の社会人枠受験をしてみては…」とのお話をいただき、今までの研究の集大成と思い、広島大学の大学院博士課程の道へ。保健学研究科入学後は、色々なゼミや講義も受講し必要単位を取得。当初、先行研究も多く、博士論文執筆のみと思っていただけに、最終テーマの決定、倫理委員会申請、副論文執筆などは予想外に大変でした。お陰様で、科学研究費も交付され、副論文も英文、邦文各1編が掲載されましたが、博士論文の構成が当初から何転かの変更があり、大幅に遅延し、修士論文と博士論文の違いを実感しました。予防医学のテーマでの博士論文のラストスパートは壮絶で、稲水ゼミの皆様の協力で博士号取得、さらに学生表彰までいただきました。まさに、人との巡り会いが応援歌であったと思います。ある友人が「50歳を過ぎた女性が博士号取得したのだから、30歳代の君達は何でも出来る、と発破をかけるのに便利。」と笑っていました。今後は、後進のために経験を生かしたいと思っています。2010年度の「小島三郎記念技術賞」という光栄な賞をいただくこともでき、お世話になった教授の方々やゼミの皆様と同門であることに誇りを持ち続けたいと思っています。

case7

ゼミでの人との出会い、論文をまとめるスキル。この体験が、とても大切な財産となっています。

島崎 一裕さん
放送大学大学院
文化科学研究科
総合文化プログラム（環境システム科学群）
（2008年3月修了）

放送大学大学院は、通信制ではありますが、やはり、ゼミに参加することをおすすめしたいですね。全国から、職種も、年齢も違う人たちが集まり、同じ学びの目的を持って、様々な話ができる機会はとても貴重なものだと思います。私が学んだ環境システム関連のゼミにも、医療関係の仕事の方もいました。社会の様々な場面で必要とされている学問分野であることがわかるだけでなく、まったく異業種の視点からの捉え方も知ることができてプラスになりましたね。もうひとつ役に立ったことは、やはり修士論文の作成です。私は、

ネットワーク理論の分野で、「集団意識」がネットワーク社会でどのように変化していくのかなどをコンピュータシュミレーションしていくものでした。論文の内容もさることながら、論文をまとめるプロセスにおいて、「問題を客観的に捉えること」、「仮説を立てて考えること」、「考えを理論的に説明できるようになったこと」、この一連のスキルが身についたことこそが財産となったと感じています。これから学びをスタートされる方たちにも、ぜひこのプロセスを体感してほしいですね。そのためのちょっとしたアドバイスですが、最初の1年間でできるだけ単位を取得して、あとは、じっくりと研究テーマを掘り下げられる時間を作ることが大切だと思います。皆さん、仕事をやりながらの学習でしょうから、やはり「時間の作り方」というものを自分なりに工夫して学習スタイルを確立することをおすすめします。たとえば、半日単位でまとめて集中できる時間をつくるとか、金曜の夜は学習にあてる、もしくは土・日に集中させるなど、それぞれの生活習慣に合った「集中時間の確保」がポイントだと思いますね。私は、勉強の他にも、SF小説のショートショートを書き続け、賞をいただいたりしていますが、時間の作り方次第で、大学院での研究、小説作りも並行してやっていくことも可能ですよ。

case8

放送大学大学院には、修士論文をまとめるための実力を習得させる良き厳しさが備わっています。

古野 高根さん
放送大学大学院
文化科学研究科
政策経営プログラム（2004年3月修了）

放送大学大学院で学んでみて感じることは、「授業レベルが高い」、「先生方が充実していて講義の内容が濃い」、「自分の専門分野以外にも社会学や歴史などもきちんと学ばなければ単位取得も厳しい」という点が挙げられます。しかしながら、この厳しさこそが、幅広く学べる学習の充実度と、高度な研究を生み出すベースであるといえます。私の修士論文のテーマは「平成バブル形成過程における心理要因」というものでしたが、この論文を作成するにあたっても、「行動経済学」の視点と「社会心理学」の背景と、両面からの考察が必要となり、単位取得のために学んだ多くの周辺学問がプラスであったことを実感することができました。論文をまとめていくプロセスにおいても、平成バブルについての新聞露出の統計を取り、計量的に分析し、株価や地価の変動に対する心理要因を数学的に証明していく必要があるなど、まさに様々な学問の領域を横断しながらの作業でした。放送大学大学院を修了した後、さらに研究を深めるために、東京経済大学博士課程に進みましたが、この際も、博士課程への入学のしくみがわからず、放送大学の先生からも適切なご助言をいただきました。そもそも、博士課程への入学の流れが整備されていないこともあったので、アドバイスがとても役に立ちました。そのおかげで、80年代の20世紀末バブルについて、さらなる深い実証的な検証ができ、それらを体系的にまとめた本を出版するに至りました。放送大学大学院で培った力、それは、「頭の整理ができて論文を書ける」、「客観的にものが考えられる力」、「第三者に筋の通った説明ができる力」ではなかったのかと感じています。これは、一つの修士論文をまとめていく過程で習得できるものであったと思います。こうした、学習を通じて、しっかりとした実力を身につけられるからこそ、放送大学大学院の存在価値があるのだと思います。

case9

子どもたちの未来のために修士論文をまとめたことで、自分自身の人間力の幅も広がったと感じています。

藤村 久夫さん
放送大学大学院
文化科学研究科
政策経営プログラム（2009年3月修了）

建設会社に勤務し、土木部長の仕事をしていたこともあり、はじめは資格習得を目的に学習をスタートさせました。もともと、今までは土木工事のハード面での知識が中心だったのに対して、大学院での学びはソ

フト面、つまり、そこで暮らし、生きている人々の心の動きに直結するものでした。それは、人間のための道づくり交通計画であり都市環境デザイン学でした。そこで一生の勉強となる幅広いキーワードを知りました。私は「子どもたちの未来の環境」に興味を持ちました。我が国では1965年頃からモータリーゼーションが始まり、車社会のための道づくりが中心となり、私たちの世代が子どもの頃に遊んだ道や路地などの楽しく豊かな環境が失われてきています。専門分野として様々な工事に携わる中で、もっと未来の子どもたちのために創意工夫することができるのではないかと強く感じていました。そこで、私が、修士論文のテーマに選んだのが「人に優しく遊びに適した舗装材の研究」でした。特に、子どもの遊びに適した舗装材の調査・研究には力を注ぎました。車中心の道づくりから、人中心の道づくりへの転換を示唆する内容になるようにまとめていきました。私たちの孫の世代が、より豊かに安全に暮らせ、安心して遊べる環境づくりへの橋渡しをしたい。次世代のために今できることを、という想いを込めることができるのではないかと感じています。こうした経験ができたのも、地域、職業、年齢を超えたゼミ仲間の方々との交流、先生方や大阪学習センターの方々のアドバイスなど、多くの人達の支えによるものだと実感しています。論文をまとめていくプロセスの積み重ねは、文章力・論文力をトレーニングできることはもちろんですが、自分自身の人間力そのものをトレーニングすることにも、大いに役立ったのではないかと思っています。放送大学大学院で経験したことで、学び続けることは、人間力を磨いていくことなのだと感じています。

case10

理論と実践の両輪による学びの場。心理臨床家としての土台を作っていただいた2年間でした。

五龍神田 由香利さん
放送大学大学院
文化科学研究科
臨床心理プログラム（2007年3月修了）

私が学んだ『臨床心理プログラム』は、1年次には5月、8月、2月に幕張本部で各1週間の面接授業があり、2年次は8月、2月の面接授業に加え、病院など臨床の現場での90時間の実習が必修です。学生の多くは既に心理の職に就いており、臨床心理士の資格取得を目指して入学します。そうした面で、他の専攻とは少し趣が異なり、より実践的な目標を持った学生生活であると思います。

私自身も、臨床心理士資格取得を目指して入学しました。当時、教員免許資格で教育相談員として相談業務に当たっていましたが、同僚のほとんどは臨床心理士であり、今後心理臨床の仕事を続けていくには、やはり臨床心理士としての自己研鑽が必要であると考えたからです。

臨床心理士は、自分の関わりによって、お会いした方の人生を左右してしまう恐れもある仕事です。放送大学大学院での2年間は、こうした自分の置かれている立場の重さをどれほど自覚しているか、先生方から繰り返し問われ続けた日々であったと思います。「通信制大学院なら仕事を続けながら資格取得のための勉強ができる。」という私の甘い考えは、面接授業初日で崩れ去りました。家庭を持ち、仕事を持ち、さらに研究、実習も…という心身ともに苦しかった大学院生時代、同期の仲間との出会いは本当に心強いものでした。日本全国に散らばる仲間とお互いに支えあいながら、修了にたどり着くことができました。

大学院を修了し3年以上が過ぎた現在、日々の臨床の中で、ともすると無意識のうちにクライアントさんの役に立とうという傲慢な気持ちが芽生えている自分に気づくことがあります。そうした時は、先生方からの教えに立ち返ることを戒めとしています。私たちの仕事は、道を指し示すことではなく、クライアントさん自身が、その方らしい選択ができるよう、寄り添っていくことです。

今回、こうした振り返りの機会をいただき、「心理臨床家として本当に大切なものは何なのか」その土台を作っていただいたのが、放送大学大学院での先生方との出会いであったと改めて思います。

市民と社会を考えるために('11)

放送大学教授（社会と産業） 天川 晃　放送大学教授（社会と産業） 髙木 保興

天川 晃 教授

髙木 保興 教授

「市民と社会を考えるために('11)」は、「市民と社会を知るために('08)」、「市民と社会を生きるために('09)」とともに、放送大学の旧「社会と経済」専攻の専任教員が全員参加で自分の得意とするトピックをとりあげながら社会科学の考え方を紹介するユニークな入門講義です。

どんな職業であれ、年齢・性別を問わず、私たちは社会で生活する中でさまざまな問題に直面します。こうした社会の中でのさまざまな問題に正面から取り組むのが社会科学です。一口に社会科学といっても、経済学、社会学、法律学、政治学、国際関係論など幅広い分野があり、そのカバーする対象や研究方法にも大きな違いがあります。

この講義の中で「社会科学には正解はない」ということが指摘されています。「正解」が出せないのにどうして「科学」といえるのか、という疑問を感じる人もいるでしょう。そういう方はぜひこの講義を受講して、自分なりにその答えを考えてみてください。

基礎化学('11)

放送大学教授（自然と環境） 濱田 嘉昭　放送大学 岡山学習センター所長 齋藤 清機

濱田 嘉昭 教授

齋藤 清機 所長

人の生命が“化学反応の高度なシステムで成立していること”を日常的にはあまり意識しないでしょう。加えて、衣食住に関わる物質、社会活動を支えるエネルギー生産、人の健康を守る医薬品、今や69億人に届こうとしている世界人口を支える食料を確保するためには欠かせない農薬、情報技術を支える物質、植物が供給してくれる炭水化物等、ありとあらゆる物質を供給する基本的な原理を『化学』が提供しています。どのようにして新しい物質を創り出すのでしょう？ そのような疑問を少しでも持たれた方は、是非化学の世界に一度目を向けて見ませんか。

基礎化学('11)はそのような興味を持たれた方に、印刷教材で最も基本的な化学の約束事を提供すると共に、放送では化学の原理に基づく最先端の技術や、機能性物質、医薬品等に関する話題も提供します。

私たちの目に見えるものも見えないものも、すべてが元素で出来ています。そのことを一度考え、皆さんの“ルーツ”である元素・分子の世界を是非覗いてみて下さい。そこには、地球規模の多くの課題、環境問題、エネルギー問題、食料問題、医療問題等の解決に繋がる力量が見えるはずです。

在宅看護論('11)

国際医療福祉大学教授（放送大学客員教授） 福島 道子　大阪市立大学教授（放送大学客員教授） 河野 あゆみ

福島 道子 教授

河野 あゆみ 教授

日本においては、在宅看護、訪問看護が1980年代半ばから制度的に発展してきました。そして在宅看護は、人口の高齢化への対応や医療改革の一端を担うものとしての役割が重要視され、政策課題としても推進されています。本来、在宅看護は人々の生活に入り込んで看護を提供するものですから、人々の生活を妨げないように、さらには質の高い生活を送ることができるように支援します。したがって、看護の場が病院から家庭に移ったという意味に留まらず、独自の対象の見方や支援方法が必要です。

本科目では、在宅療養する人々のクオリティ・オブ・ライフを向上させることを目的として、各々のニーズを探り、ニーズを満たす方策を立て、方策を実施するために必要な知識と技術を学習します。

なお、本科目は学部学生一般に役立つことを意識していますが、同時に、看護師国家試験を目指して通信制で学んでいる准看護師も視野に入れています。

特別支援教育基礎論（'11）

帝京大学教授
（放送大学客員教授）吉田 昌義　　植草学園大学准教授
（放送大学客員准教授）鳥居 深雪

吉田 昌義 教授

鳥居 深雪 准教授

平成19年4月に学校教育法が改正・施行され、それまでの「特殊教育」から「特別支援教育」に変わりました。特別支援教育は、一人ひとりの幼児児童生徒の教育的ニーズに応じて、特別支援学校、特別支援学級、通級指導教室という特別な教育の場に限らず、すべての幼稚園、小学校、中学校、高等学校、中等教育学校においても、障害のある幼児児童生徒に適切な指導と必要な支援を行うことを目指しています。

このため本科目では、視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由、病弱・身体虚弱、重複障害、自閉症、LD、ADHDなどについて、基本的な理解や指導について解説します。

なお、教員免許状も、特別支援学校教諭免許状に一本化されました。

特別支援学校教諭免許状を取得することを目ざす方々に限らず、全国の先生方、さらには、特別支援教育に関心のある方々に広く視聴いただくことを願っています。

比較行動学（'11）―ヒト観の再構築―

京都大学大学院教授
（放送大学客員教授）藤田 和生

藤田 和生 教授

ヒトは動物界において特別な存在だと考えられてきました。道具を使う、道具を作る、言語を操る、文化を持つ、これらはいずれもある時代にはヒトの「定義」でした。しかし、動物の研究が進むにつれて、これらはいずれも、少なくとも原初的な形では動物にも存在することが次々と実証され、ヒトの定義はそのたびに作り替えられてきたのです。いまや最後の砦とも思われる意識や内省などすら、動物にその萌芽が見られることが明らかにされています。

こうした諸事実をまのあたりにするとき、私たちは、ヒトという存在を動物界の中にどのように位置づければよいのか、考え直さなければなりません。この講義では、最新の研究成果に基づいて、動物たちの心の働きがどのようなものであるかを学びます。それはたぶんいま皆さんが考えているより、はるかに豊かなものなのです。そうした知識を材料にして、ヒトとは何かをいま一度考え、地球化時代の新たなヒト観を提示したいと思います。

現代日本の政治（'11）

早稲田大学教授
（放送大学客員教授）久米 郁男　　早稲田大学教授
（放送大学客員教授）河野 勝

久米 郁男 教授

河野 勝 教授

近年の頻繁な首相交代は、日本政治が混迷を深めていることを象徴的に示すように見える。解決の必要が叫ばれつつ、先送りされる政策課題も多い。このような時代状況において政治を考えるとき、人はともすれば拙速に「あるべき政治の姿」を熱く語りがちになる。しかし、そのような拙速を避けて、まずは事実を冷静に認識し分析することが必要である。政治現象を、マスメディアやインターネットなどを通して世にあふれる情報にもとづいて、印象論風に評論したり、頭ごなしに善悪の評価をするのではなく、なぜそのような現象が生じているのかを、まず客観的に分析し、理解することが重要である。そうでなければ、それらが時代を超えて持つ本当の意義や重要性を見失ってしまう。そのためには、政治学の理論に基づいて現代日本の政治を体系的に一般化可能な形で説明する必要がある。本講義は、日本政治をそのような「政治学的思考」にもとづいて理解することを目指す。

イスラーム世界の歴史的展開（'11）

お茶の水女子大学教授
（放送大学客員教授）三浦 徹

三浦 徹 教授

世界のムスリム人口は16億人ともいわれ、アジア、アフリカから欧米まで地球規模にひろがり、民族や文化また政治経済も多様です。国際政治や石油エネルギー資源などイスラーム世界は21世紀を左右する鍵となっています。7世紀にアラビア半島に誕生したイスラームは、百年後にはイベリア半島からアフガニスタンまで広がり、さらに軍人や商人や学者の移動によって世界は拡充し、他の文化圏との交流を通じて、ダイナミックな歴史を展開します。本講義は、生誕から現代までのイスラーム世界の歴史を扱い、放送大学のテレビによる講義としては最初のものです。初めてイスラーム世界に触れる人にもわかりやすいように、第一部では歴史的な発展を軸にイスラーム世界を縦に通観し、第二部では社会文化のしくみをテーマごとに横断する構成をとります。対象地域は中東（アラブ、トルコ、イラン）を主としますが、他の地域との交流や比較を重視し、イスラーム世界を学ぶことから、歴史と現代を読み解くことをめざします。

進化する情報社会（'11）

放送大学教授
（ICT活用・遠隔教育センター）児玉 晴男
大阪大学教授
（放送大学客員教授）小牧 省三

児玉 晴男 教授

小牧 省三 教授

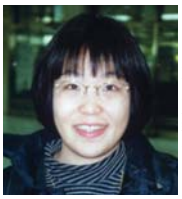
この総合科目は、「情報と社会（'06）」を引き継いでいます。この科目の新しい目標は、情報通信技術（ICT）と社会がどのように相互に作用しあって進化しているかを理解することにあります。

現代は、すでにICTがなければ成り立たない社会になっています。本科目は、産業や暮らしの局面、いま大きく変化しつつある領域、ICTが破壊しつつある分野などに注意を払い、社会としてICTの適切な活用の仕方を探求していきます。ICTの進歩が社会、経済、産業、科学研究、医療、政治、地方自治、生活、コミュニケーション、国際関係などにもたらしている変化を確認します。そして、情報社会の将来を展望するとともに、ICTの発展のあり方について考えます。

各回の講義はオムニバスになっていますが、その内容は多様な関連をもっています。印刷教材と放送教材をロールプレイングゲームのように楽しんで学習し、新たな発見をしてもらうことを希望します。

観光の新しい潮流と地域（'11）

放送大学准教授
（社会と産業）原田 順子
東京工業大学大学院准教授
（放送大学客員准教授）十代田 朗


原田 順子 准教授

十代田 朗 准教授

現在、わが国では観光立国に向かって様々な取り組みがなされています。2006年に観光基本法が全面改定され、翌年には「観光立国推進基本計画」というマスタープランが策定されました。そして、2008年に観光庁が設立されたことは、皆様ご存知と思います。

この授業は総合科目です。観光学は、都市・地域計画、歴史学、経営学、経済学、地理学、社会学等と数多くの学問領域にわたります。本講義では、タイトルからもわかりますように、「地域」を視座に据えて新しい潮流について学習します。

観光の語源から始まり、江戸時代にまでさかのぼった観光の歴史、都市と観光、農山村と観光、文化観光、世界遺産、エコツーリズム、地域づくり、人材育成等と幅広いテーマを丁寧に解説しています。同時に、テレビ科目の強みを活かして、写真や絵図、ロケ映像を豊富に含んでおります。

仕事で観光に携わる方、地域振興に興味のある方、観光を体系的に学びたい方等におすすめいたします。

生活リスクマネジメント（'11）

放送大学教授
（生活健康科学）奈良 由美子

奈良 由美子 教授

本科目では、リスクの様相、リスクの認識、リスクへの対処という3つの観点から「生活リスク」を考えます。生活にはどのようなリスクがあって、現代では本当に生活リスクが客観的に増大しているのでしょうか。また、個人はどのようにリスクを認知していて、生活者がリスクに敏感になってきた背景や要因は何でしょう。さらには、リスク低減の管理手法、その実態や課題はどのようでありましょうか。これらを、安全・安心、信頼といった分析概念を用いながら検討していきます。

本科目のねらいは、生活者が自らのリスクとリスクマネジメントを考えていただくことにあります。同時に、例えば地域やNPO活動の担い手、企業の担当者や医療従事者、また行政の担当者のかたにも是非履修していただきたいと思います。そういったかたが日々の業務のなかで関わる生活者（住民、消費者、患者といった立場で）にとってのリスクの様相、リスクの認識、そしてリスク対処の特徴や実態を理解することは、業務遂行上、また社会全体としてリスクを低減するために重要だからです。

現代社会心理学特論（'11）

放送大学准教授
（人間発達科学）森 津太子

森 津太子 准教授

大学院の授業科目には、すでに「社会心理学特論（'09）」という社会心理学科目が開講されていますが、この科目に加え、2011年度より新たに「現代社会心理学特論（'11）」を開講することになりました。

今回、科目名に「現代」ということばを冠したのには、様々な側面で“現代性”を強調しようと考えたためです。本科目の中心となるのは、20世紀後半以降に発展した認知心理学的なアプローチによる社会心理学研究ですが、感情、意識、身体性など、ごく最近になって注目を集め始めたトピックも含めています。また、進化心理学や脳神経科学など、社会心理学に新たな視点を提供すると期待されている学問領域を紹介したり、経済、政治、司法といった私たちの生活に密接に関わる領域の現代的課題に社会心理学の知見がどう援用されているかも解説しています。結果的にかなり欲張った内容になりましたが、受講生の皆さんには社会心理学が多様性と柔軟性を持った学問であることがわかっていただけるのではないかと思っています。

国語国文学研究の成立（'11）

東京大学大学院教授
（放送大学客員教授）長島 弘明

長島 弘明 教授

この科目は、「言語文化研究Ⅰ('07)－国語国文学研究の成立－」を改訂したものです。授業の目標は、明治以降の国語学・国文学研究が、江戸時代の国学を基盤としながら西洋の学問・文化等の影響を受けて変容し、近代的な学問として成立していった過程を、さまざまな方向から検討し明らかにすることです。

また、あわせて目標としたいのは、国学から国語学・国文学研究への学問的方法の変化を知るだけではなく、国学や国語学・国文学研究が研究対象にしていることば（国語すなわち日本語）や文学（国文学すなわち日本文学）自体が、幕末・明治期にどのような変化を遂げているかを考え、研究対象の変容が、それを研究する方法の変容や革新と密接に関わっていることを理解することです。

今日の国語学・国文学研究が将来どのようになってゆくか。それを考えるためにも学問の来歴を改めて知る必要があり、この授業がよい機会となることを願っています。

栃木学習センター所長　鯨井 佑士

学　習　セ　ン　タ　ー　だ　よ　り

緑あふれる栃木学習センター

栃木学習センターはＪＲ宇都宮駅の東方約2キロに位置する緑豊かな宇都宮大学峰キャンパスの中にあります。施設は同大学付属図書館との合築で、窓が大きく取られているため採光が良く、学び舎にふさわしい明るい空間です。

栃木学習センター外観

当センターの特色の一つは、この恵まれた立地環境にあるといえるでしょう。峰キャンパスはもともと高等農林学校の敷地だったため、植物見本園のようなところがあり、大変珍しい樹木が植えられています。四季折々に美しい自然が見られ、学生のなかには勉強の合間に構内を散策したり、天気がよければ屋外で食事をとる人もいるようです。

現在、栃木学習センターには学部・大学院を合わせて948名が在籍しています。市町別に見ると、全体の36%を占める宇都宮市を中心に、県内すべての市町において放送大学生が学んでいます。また、茨城、群馬、埼玉など県外に居住する学生も7%所属しています。

地域に根ざした授業を企画

面接授業は、地域に根ざした特色のあるテーマを毎年企画しています。今年7月には、栃木学習センターとしては初の試みとなる、宿泊をともなう授業「戦場ヶ原湿原への土砂流入の影響」を開講しました。観光地としても知られる戦場ヶ原周辺はどんな環境問題に直面しているのか。担当講師の話を聞きながら2日間にわたって現地踏査するという授業でしたが、栃木だけでなく長野・京都・福岡などからも学生が参加。自炊を基本としながら学生と教職員が共に過ごすなかで互いに親睦を深めていきました。踏査後のミーティングでは驚くほど活発な議論も展開されました。学生からは「有意義な授業だった」「参加してよかった」との声が聞かれ、私ども職員にとっても心に残る授業となりました。

面接授業（日光ふれあいハウス前で記念撮影）

活気あふれる学生による自主活動

学生による活発な自主活動も栃木学習センターの大きな特長です。心理学研究会など6つのサークル活動のほか、最近では、現役の学生や卒業生、旧職員も加わった「放送大学を愛する会」が定期的に懇親会を開いています。このほか学生有志による「まちづくり研究会」が発足。今年12月17日には宇都宮市庁舎で開催されるコンテスト「大学生によるまちづくり提案」に参加。平均年齢60歳超の当会メンバーが「オリオン通りにシニア・ビジネスの可能性を探る」と題して、高齢化社会に向けてのまちづくりを提案する予定です。

まちづくり研究会（フィールドワークの様子）

目で楽しむ学習センターホームページ

学生の利便性の向上という観点から、栃木学習センターでは独自のホームページを開設しています。事務連絡の掲載にとどまらず、前述したユニークな授業の様子や学生による活動紹介、学生インタビュー記事、各種イベントの開催報告、季節の便りなど、学習センターの雰囲気が伝わるような親しみやすい情報をタイムリーに発信していますので、ぜひアクセスしてみてください。

ホームページではキャンパスの風景写真も掲載

栃木学習センター
栃木県宇都宮市峰町350（宇都宮大学構内）　〒321-0943
JR宇都宮駅からバスで10分　電話：028-632-0572

宮崎学習センター所長　岡林 稔

学　習　セ　ン　タ　ー　だ　よ　り

緑と太陽がいっぱいの宮崎学習センター

宮崎学習センターは日向市にあります

県都である宮崎市から北に約70キロほど離れた日向市に宮崎学習センターがあります。その途中には、宮崎県民だけでなく全国の畜産農家を震撼させた口蹄疫が発症した川南という町があります。防疫のために学習センターの玄関マットには毎日消毒液を浸す職員の気遣いも大変で、燎原の火のように宮崎市周辺まで広まっていった口蹄疫禍は学生さんの家族にも及ぶことがありました。「5000頭飼っている豚をあちこち分散させようとしている」と聞いた翌週には、「結局全頭を殺処分しました」と悲痛な報告を耳にしたこともありました。こうした畜産農家の苦悩とは比較になりませんが、宮崎学習センターでも7、8月の入学相談会もいくつかキャンセルとなりました。

学習センター近くのビーチとサーファー

しかし、今は非常事態宣言も解除され、空っぽになっていた畜舎に牛や豚が飼われ始めたニュースが聞かれ、畜産農家は復興を目指して再スタートし始めたようです。ご心配いただいた保護者の破産等による学費援助の申請もなかったのですが、疫病の恐ろしさとともに、改めて放送大学の、全天候型の単位制学費の合理性を認識したことでした。

現在学生数は650～700名の間を動いています。今回は、やはり入学相談会などの中止が響いたようです。宮崎市周辺に50%近くの学生さんが在籍しており、市のご協力で宮崎市教育情報研修センターに分室を置かせてもらい、週3日はここで視聴・放送教材の貸出受け付けを行っております。土曜は職員が一人行きますが、火曜木曜は学生さんのボランティアによって分室が稼働できている状態です。不利な立地条件の克服には地方自治体や学生さんの協力が大きな力となっています。

地域の特性を生かした面接授業

照葉樹林の中での面接授業

来春からは鹿児島から福岡まで九州新幹線が開通します。しかし、宮崎―日向―大分を結ぶこの「裏九州？」はあくまで交通の利便性からは遠く隔てられています。この不利な条件をむしろこれからは特性にする時代が来るかもしれないと、ユニークな学習センターの在り方を模索しています。何よりもBS放送での受講が可能になる利点が強調できますし、さらに面接授業の科目設定にはどこにもない、宮崎ならではの「地域特性」を意識して、「宮崎国際音楽祭（ヴァイオリンの巨匠アイザック・スターン氏が6年間出演）の舞台裏」とか、世界遺産登録が期待される照葉樹林の綾町を舞台とした「照葉樹林概論」、来年度は「口蹄疫のもたらしたもの」など、ローカリティ豊かで、しかも日本列島を貫くようなテーマを設定することにも心がけています。

学友会ができました

遅ればせながらも学友会がようやく立ち上がりました。5月には第1回の総会があったばかりですが、立て続けにレクレーションの行事が続いて、この原稿を書いています11月6日には霧島高千穂の峰登山をしているようです。その他に小さなグループでの試験前の勉強会や新入生へのアドバイス。こうした学生さんの活動は、分室サポートや8サークルの活動を中心に学習センター活性化の原動力になってもいます。

第1回学友会総会

宮崎学習センター
日向市本町11-11（日向市役所隣）〒883-8510
JR日向市駅下車徒歩7分　電話：0982-53-1893

学生募集―教養学部学生及び大学院修士選科生・修士科目生

広報課

平成23年度第1学期の学生募集を以下のとおり行います。

平成22年11月15日(月)…平成23年度第1学期学生募集要項配布開始

出願期間	平成22年11月15日(月)～平成23年2月28日(月)
合否通知等	平成22年12月上旬～平成23年3月中旬
学費の納入	平成22年12月上旬～平成23年3月末
入学許可通知	平成23年1月下旬～平成23年3月末
印刷教材等の配送	平成23年2月下旬～平成23年3月末
授業開始	平成23年4月1日(金)

放送大学に関心があるご友人、ご親戚他お知り合いの方にも、この機会にぜひ本学についてご紹介くださり、入学をお薦めいただきますようお願い申しあげます。

平成23年3月末をもって学籍が切れる学生の方で、平成23年度第1学期以降も引続き学習を希望される場合は、改めて入学手続きが必要となりますが、入学料が割引になります。

・出願締切日は平成23年2月28日(月)＜必着＞です。

全国の面接授業が検索できるようになりました

学習センター支援室

日程や担当講師など、自分の探したい条件から、全国の面接授業を検索できるようになりました。

「仕事が休みの日に授業を受けたい」「普段テレビ等でしか見られない講師の授業を直接受けてみたい」「この分野を学びたい」など、自分に合った情報から、ご希望の科目をお探しください。

キャンパスネットワークホームページ から

(URL:https://www.campus.ouj.ac.jp/)

学習情報 ➡ **面接授業**

➡ **面接授業関係情報へ**

➡ **面接授業概要一覧へ**

※本学HPのトップページからも検索できます。

2010(平成22)年度放送大学学位記授与式について

総務課

2010(平成22)年度学位記授与式の日程が次のとおり決まりましたので、お知らせします。

日時:平成23年3月26日(土)午前11時00分から
場所:NHKホール(東京都渋谷区神南2-2-1)

「放送大学創立25周年記念募金」ただ今募集中

総務課

放送大学では、創立25周年を記念した募金を行っています。この募金は、学習センターにおける学習環境・学習活動の改善や同窓会活動の支援などに役立てられます。
全国の学習センターに募金趣意書と振込用紙を備え付けていますので、皆様のご協力をお願いします。
これまでの募金総額や今年度の使途及び募金の趣旨等の詳細は、放送大学のホームページをご覧下さい。
また、募金についてのお問い合せは総務部総務課総務係(電話:043-298-4206)までお願いします。

●募集金額
学生の方は一口5千円ですが、それ以下のご寄付も大切に活用させていただきます。

編集後記

お読み戴いた「放送大学通信」は、今号で記念すべき第100号となりました。第1号からずっと読んでいる私にとりましても、感慨ひとしおのものがあります。初期の頃に書かれた文章には、日本で初めて、と言うよりも、世界で初めての、テレビ・ラジオによる、正規の大学を、いかに建設してゆくかという、強い意気込みがあふれていました。

第100号を迎えた今、放送大学は、発足当初には世界規模では存在していなかったインターネットにも大きく基盤を広げ、また、NHKと同じレベルでの衛星放送をする準備を着々と行っています。世界が様々な困難を抱える中、学問は、その本来の力を、ますます発揮することを要請されているのであり、放送大学もそのために力を傾注してゆきたいと考えています。(青山昌文)

ご意見やご感想をお聞かせください。メールアドレス editor@ouj.ac.jp

放送大学通信 オン・エア 編集委員(平成22年度)
委員長 教授 松村 祥子
委員 教授 高崎 絹子
准教授 岡崎 友典
准教授 原田 順子
教授 青山 昌文
教授 杉森 哲也
教授 生井澤 寛
准教授 大西 仁
千葉学習センター所長 教授 宮崎 清
東京文京学習センター所長 教授 桂井 誠
編集事務担当 総務部広報課

放送大学
http://www.ouj.ac.jp/ ISSN 1343-3369